

一 次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字で書きなさい。

①時をキザむ。

②異常キシヨウ。

③はるかタイコの時代。

④カイヨウ漁業で栄えた町。

⑤これが私のテンシヨクだ。

二 次の①～⑤の——線部の漢字の読みを、それぞれ平仮名で書きなさい。

①わたしは潔白だ。

②中身が空になる。

③自力でやりとげる。

④才能の芽生え。

⑤不世出の画家。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

刑事が聞き込みに来るようなゴミ捨て場から解放され、新しく引越したアパートはゴミ捨て場のきれいなところだった。

うちのアパートがある一角では、私が住む第一××荘と第二××荘、そして数軒の民家で一つのゴミ集積所を共有している。このゴミ集積所には「夜間絶対にゴミを出すな」という強い口調の貼り紙がしてあり、ゴミの一つも落ちているところを見たことがない。アパートに入居する際にも、大家のおばあさんから「ここはゴミにすぐうるさいから、必ず収集日の朝に出してくださいね」と

1 をささ

れ、「杉並区のゴミ収集法」というプリントまで渡された。
ゴミ捨て場がきれいなのは気持ちがいいことだ。常に悪臭が漂っているよりは気持ちがいいに決まっている。ゴミ捨て場の前を通らないよう遠回りをする必要もない。私はしばし、生活がほんの少しグレードアップしたような幸福な気分にも包まれた。

しかしそんな幸福感も長くは続かなかった。

ゴミは午前八時以前に出してはならない。ゴミ収集車は午前九時半にやって来る。遅寝遅起きの生活をする人間には、ゴミを出す時間がない。目を覚まし、時計を見ては「今日もゴミを出せなかった」と落ち込む日が続く、ただでさえあまり頻繁にゴミを出さない習性で、燃えるゴミは一週間に一度、燃えないゴミは一月に一度という最悪のサイクルに陥りつづけた。たまりかねて、明け方まで起き続けて早朝に出すこともある。ルールを破っていることはわかっているが、こつちにはこつちの生活のリズムがある。時々、周囲の住民と家の前ですれ違ふと、ものすごい形相で睨まれることがある。「ルールを守らない二等市民」とでもいったような、痛い視線である。うちには時々大家さんが困った顔で訪ねてくる。

「ゴミは夜出さないでくださいね。また表の家からものすごい剣幕で怒られちゃって」

そういうときの大家さんは心底悲しそうな顔をしている。

《注》 1 グレードアップ——段階が上がること。

うちのゴミ集積所を使っている賃貸住宅は第一××荘と第二××荘の二つ。ゴミのルールを無視しているのは賃貸住宅居住民だと周囲の住人が思うのは当然だろう。私が一方的に悪いのはわかっている。しかしだからといって、七十過ぎのおばあさんをすごい剣幕で叱り飛ばしていいということにはならない。

こちらにも言い分がある。個人は遅寝遅起き生活を改善すれば済む話かもしれないが、印刷所に勤める二〇三号室の男性には夜勤のシフトがあり、夕方アパートを出て午前十一時頃戻ってくる。最近二〇一号室に入った男性は、仕事は知らないが、朝四時半に仕事を終えて帰ってくる。

社会にはそういう人たちがたくさん住んでいる。みんながみんな結婚して家庭を持ち、だんなさんがパジャマ姿で新聞を取り、スーツに着替えて会社へ行き、そのあと奥さんがゴミを出す、という生活をしているわけではない。

奥さん、あなたがスーパーで買うおかずを、夜を徹してトラックで運んでいる人たちがいて、だんなさん、あなたが出社前に読む新聞を印刷して運んでいる人たちがいる。あなたの生活の快適さを 2 ために、あなたが眠っている間に働いている人たちが社会にはたくさんいるのだ。そもそも、ゴミ収集車を運転している人たちだっている。ゴミ収集車を運転する人たちは、一体いつゴミを出したらいいのだろうか？

しかしあなたは自分の家の前にそういう人間たちが住んでいることを薄気味悪く感じ、自分のリズムに合わせた一方的なルールを強要し、それが守れないと二等市民のような目つきで見ろ。

② 社会の全員がゴミのルールを守るような生活をしていたら、あなたの生活は成り立たないというのに。なぜあなたにはそういう想像力が働かないのだろうか。

私のゴミ・ストレスは、夏に急展開を見せた。ある朝、大家のおばあさんが私の部屋を訪ねてきた。アパートの階段の下にうちのアパー

ト専用のポリバケツを置くことにし、各収集日の朝に大家さんがそれを自分の家のゴミ捨て場まで運んで捨てることにした、という。ちなみに大家さんの家のゴミ捨て場とは、うちのゴミ捨て場の前を通って通りに出、さらに角を曲がって三十メートルほど進んだ場所にある。七十過ぎのおばあさんが大きなポリバケツを運ぶには、楽な距離ではない。

「でも運ぶのが大変じゃないですか？」

「こっちのゴミ捨て場はそんなにうるさくないし、うちの前にあるから気が楽なんです。それに、こうすればあなた方だっていつでも好きな時にゴミが出せるからいいでしょう？」

大家さんにも周辺住民から相当なプレッシャーがかけられていたらしい。彼女がそこまで悩んだ末に出した結論なのだから、黙って従うことにした。

かくして私はゴミ・ストレスから解放された。ゴミを出すためだけに早起きをしなくても済むようになった。日常の一つの大きな問題が確実に消え去った。大家さんの労力を抜きにすれば、誰にとっても好ましい結果に落ち着いたわけである。

しかし私にはまだわりきれない思いが残っている。

結局、彼らが望む快適な生活の前に、私たちがひれ伏したのだ。③ 私は何をいわれようが、どんな目つきで見られようが、自分のリズムでゴミを出し、自分の存在を主張すべきではなかったのだろうか。彼らの力が増すことに、最終的には手を貸してしまったような後味の悪さが、今でも残っている。

(星野博美『銭湯の女神』より。作問の都合上、表現を改めた部分があります。)

※ 本文中から抜き出して答える問題では、句読点や「」などの記号は、字数に数えないものとします。

問一 1 に当てはまる言葉を、ひらがな2字で答えなさい。

問二 線部①へ七十過ぎのおばあさんをすごい剣幕で叱り飛ばしていいということにはならないについて。

I 「剣幕」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 怒って興奮している荒々しい態度や顔つき。
- イ 無愛想な態度で頬をふくらませた顔つき。
- ウ 怒りを晴らすためにとる乱暴な態度や顔つき。
- エ いらだちを前面に押し出した態度や顔つき。
- オ 怒りを必死に押し殺した態度や顔つき。

II なぜへ七十過ぎのおばあさんをすごい剣幕で叱り飛ばしていいということにはならないと言えるのか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 賃貸住宅居住民である「私」が悪いのだから、周囲の住民がすごい剣幕で叱り飛ばさなければならないのは「私」であり、七十過ぎのおばあさんである大家さんはこのことにはまったく関係がなく、叱り飛ばされる必要がないから。
- イ 賃貸住宅居住民である「私」が悪いのだから、大家さんが注意されるのは仕方がないとしても、七十過ぎの大家さんを周囲の住民が二等市民扱いしてすごい剣幕で叱り飛ばすのは、この地域の住民の和を乱すことになるから。

ウ 賃貸住宅居住民である「私」は確かに悪いことをしているのだが、収集日が少ないことの方が問題なので、周囲の住民は七十過ぎの大家さんをすごい剣幕で叱り飛ばすより前に「私」にゴミ出しの実情を聞きに来るべきだから。

エ 賃貸住宅居住民である「私」が悪いのは確かだが、周囲の住民はそのことを大家さんに話して「私」に注意するよう言えばいいだけのことで、七十過ぎのおばあさんである大家さんをすごい剣幕で叱り飛ばす必要はどこにもないから。
オ 賃貸住宅居住民である「私」が悪いのは仕方がないが、それをすべて大家さんが悪いとしてすごい剣幕で叱り飛ばしてしまつたら、七十過ぎの大家さんかわいそうだし、この賃貸住宅には誰も住まなくなってしまうから。

問三 2 に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 拡張する イ 補強する ウ 応援する エ 獲得する オ 保証する

問四 線部②へ社会の成員全員がゴミのルールを守るような生活をしていたら、あなたの生活は成り立たないについて。

I 「あなた」とは、だれのことを指していますか。本文中から最も適当な5字の言葉を抜き出さない。

II ここでいう「ゴミのルール」の内容を、「こと」に続く形で、本文中の言葉を用いて20字以上25字以内で説明しなさい。

Ⅲ 「あなたの生活は成り立たない」と筆者が考えるのはなぜですか。その理由を説明した「あなたの生活は」にも支えられているから。」の空欄を15字以上20字以内で埋めなさい。ただし「ゴミのルール」という言葉を必ず使うこと。

問五 — 線部③「私は何をいわれようが、どんな目つきで見られようが、自分のリズムでゴミを出し、自分の存在を主張すべきではなかったのだろうか」とあるが、「私」が「自分のリズムでゴミを出し、自分の存在を主張する」ということは、どんな意見を言うことになりますか。その意見を、本文中の言葉を用いて60字以上65字以内で書きなさい。

四 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学五年生の美代子は、両親と兄、姉、弟との六人家族です。一家は、晶子の親から六畳と四畳半の部屋に風呂と台所があるだけの家を借りて住んでいます。

南小へ転校して初めての運動会。①運動会は毎年、私にとっての晴れ舞台だった。

私は三組のリレー選手に選ばれた。晶子も一組の選手になり、共にアンカーを務め、競うことになった。しかも、学年の五クラスの間では一組と三組が二強と見られていた。

運動会本番の前々日、全体の予行演習を行う。勿論、リレーの練習も本番さながらに行われた。

「五年生女子のリレーに出場する選手の方は集合場所に集まってください」

放送委員がアナウンスする声が、ハウリングを起こすスピーカーから聞こえた。

集合場所前列に並んだとき、自分の薄汚れたみすばらしいズックが気になり、すぐに裸足になった。それを晶子はめざとく見つけ「ふん、靴も買ってもらえない子がいる」と、鼻で笑った。

北小に通っていた頃、「ごめんね、美代子」と、毎年、母がすまなそうに謝る言葉に「ううん、全然平気だよ。それに新しい靴なんて履いたら、足にマメができるだけだもん。私ね、裸足の女王って言われてるんだから」と、②精一杯の嘘をついたことを思い出した。

「位置について、よいい」

パンッ。ピストルの音でリレーは始まった。走る距離は一人一周だ。練習といえども、各々、クラスの大声援が校庭を埋め尽くす。

予想通り、一組と三組のマッチレースになった。一組が先頭で、アンカーの晶子にバトンが渡った。私は二番手でバトンを受け取り、前を行く晶子の背中を追った。私の身体はバネになったように地面を蹴り、半周付近で晶子を捕らえ、並んだ。人の顔色をうかがうほどの余

裕はないのに、なぜか、必死に顔をゆがませる晶子が分かった。と、晶子の身体が私の走路を邪魔するように入り込んできた。私は身体をひよいとねじ曲げ、それを難なくかわすと、晶子を抜き去った。

「おお」という歓声とどよめきが聞こえた。

そのまま一気にテープを切った。

その瞬間、背後でどさつと崩れてゆく影を感じた。

私は膝に両手を当て「はあはあ」と荒い息をつきながら、その方向を見ると、晶子が前のめりに倒れていた。その脇を後続のランナーが次々に抜き去る。晶子は半ペソをかきながら、よろよろと起き上がると、歩いたままゴールに入った。その顔を見ると、ラインを引いた石灰の粉が顔一面に付いていた。

「おい、見ろよ、あいつの顔。ありやあ、おかめのお面だ」

ひとりの男子が、晶子を指差してそうからかうと、どつと笑いが起こった。子どもは残酷で思ったことを口にする。本来なら憐れに思う場面なのかもしれないが、私の心の中にはつきりとした優越感が生まれていた。

その日、リレーのメンバー、朋ちゃん、日登美ちゃん、よっちゃんと一緒に帰った。

「晶子、ちよつといい気味だったと思わない？」日登美ちゃんが切り出す。

「あの顔、笑えた」朋ちゃんがすぐに反応した。

「私さあ、幼稚園のとき、晶子にクレヨン全部折られてさあ」日登美ちゃんが言う。

「私、トイレに閉じ込められたことがある」よっちゃんが怒る。

晶子から受けた仕打ちを仲間が口々に言い出すと、ほつとする思いがした。

……私だけじゃなかったんだ。

「だから、一組だけには負けたくないよね」

「うんうん」

さながら、被害者の会だ。皮肉なものだが、妙なことで四人の中に連帯感が生まれ結束した。

「あ、そういえば、カラスウリって本当に効くのかなあ？」よっちゃんが真顔でみんなに話しかけた。

カラスウリとは、小振りなタマゴ大の実のことで、秋になると雑木林などで木に巻きついた蔓に橙色の実をならせた。その実の中には、納豆のように粘り気のある種が詰まっっていて、それをふくらはぎに塗ると足が速くなるという噂があった。何の根拠もない迷信の類いだが、当時、その町の子どもたちの間では、そう信じられていた。

「うちの兄ちゃんが、あれは絶対に効くって言ってた」

「えーっ、ホント？」

「うちのお姉ちゃんも言ってた」

「でも、あんなもの塗るのって気持ち悪いよね」

「そうだけさあ」

「あ、知ってる？一番効くカラスウリって裏山にあるやつなんだって」

「裏山」と呼ばれる町外れの雑木林になる実は、幻のカラスウリと言われ、子どもでは手の届かない高いところになっている。

「だけど、あんな藪の中に穫りに行くの怖いよ」

私は男子に交じって、その「裏山」にカブトムシを捕りに行ったことがあった。日光の殆どが遮られた雑木林の中は、湿った風と草木の匂いに満ちていた。半袖から出た腕を蚊に食われ、とげのある木々の小枝で傷を作ろうとも、案外平気だった。蜘蛛の巣をかき分け、時にアオダイショウに出くわしても驚きはしなかった。

「私が探ってきてあげようか？」

私が事も無げにそう言うと、みんな「えーっ、ホント。すごい」と、驚いた。

そんな他愛ない話をしながら「じゃあね、また明日」と、縦笛が差さったランドセルを背中でゴトゴトと弾ませながら、みんな家に帰っていった。

その晩、迷惑な訪問者が現れた。

「ごめんください」のひと言もなく、玄関の引き戸は開けられた。

キキキキッ。

その音に家族全員が驚きながら玄関へと視線を送る。そこには、晶子と晶子の母親が、既に入り込んでいた。

両親が立ち上がり、すぐに対応する。

「あ、村上さんの奥さん。何か？」

「何かじゃないわよ。うちの子、おたくの美代ちゃんにケガさせられたのっ」

その怒鳴り声にもびっくりしたが、私がケガをさせたという身に覚えのないことに身体が硬直した。両親は振り返り、私を見た。

「今日、運動会の練習で、うちの子にわざと足をかけて転ばせたっていうじゃないのっ。一体、どんな教育してるの、おたくはっ」

晶子を見ると、その膝には大袈裟な包帯が幾重にも巻かれていた。

「晶子の友達だと思ってたから、何かにつけ一緒に遊ばせてあげたのに、まあこんなことされたんじゃないわっ」

「美代子……」父が私を見つめた。

私はただ黙って身を縮めた。「違っ」と反論すれば火に ようなものだと感じたからだ。

「原田さんの紹介だったから、他の借り手を断ってまで貸してあげたのに、ホント、恩を仇で返すってこういうことよ。今度こんなことしたら出てってもらわなくちゃねっ」

晶子の母親は踵を返しながら、捨て台詞のように吐いた。

キキキキッ、ピシヤ。

引き戸が閉まった後、しばらくの間、静寂に包まれた。家族みんな、啞然として声が出なかったのだろう。

最初に口を開いたのは兄で「何なんだ、あのおばさん」と、忌々しそうに言った。それに続くように姉が「ばっかじゃないの」と首を捻った。

「やめなさい」母がふたりをたしなめる。

父は「ふう」と、気を鎮めるように大きく息を吐き、私に向かって「そんなことしたのか？」と、改めて聞き直した。

「ううん、してない。晶子ちゃんは自分で転んだ。ホントだよ、みんな知ってる、ホントだっ」私はそう言いながら、あふれてくる涙を手の甲でぬぐった。

私はてっきり叱られるものだと思っていたが、父は「そうか、もう分かったから……。泣くな」と、私の頭を撫でた。私はほっとした気持ちと、親が信じてくれたという想いに、声をあげて泣いた。

その夜、兄弟と並んで入った布団の中で、私は寝付かれなかった。リレーで晶子を負かせば、きっとまた難癖をつけられる。そうしたらうちの家族はここから追い出されるに違いない。あの晩の私の頭の中には、路頭に迷う一家の図が渦巻いていた。

私のせいで……。

運動会前日は準備だけで授業はなかった。

私たちは体育館から障害物競走に使う平均台や跳び箱を運んだりした。

校門には六年生が作った巨大な看板が取り付けられ、校庭の空には万国旗が張り巡らされた。

テントの下の本部席では、放送委員が徒競走のときに使うレコードをポータブルプレイヤーに載せ、確認をしている。威勢のいい曲「カルメン」が大音響で響いた。

着々と運動会の準備は進み、その様子に ④ 私は追い込まれていく気分になっていた。

遠目に見た晶子の膝には、これ見よがしに包帯が巻かれていた。それは周囲の同情を得るためと、私への無言の圧力なのだと感じた。「はあ……どうしよう？」

見上げた空はどんよりと曇り、私の心を表しているようだった。このまま明日雨になり、運動会が中止になればいいのにと願った。

「美代ちゃん、明日頑張ろうね」

リレーのメンバーにその声をかけられても「あ、うん、そうだね」と、歯切れの悪い答え方しかできなかった。

「あ、そうだ、美代ちゃん、カラスウリは？」

「あ、そうだったね、ははは」私は笑って誤魔化した。カラスウリのことなどすっかり忘れていた。

……もしかすると、私は仲間を裏切ってしまうかもしれない。そう思うと、まともに彼女たちの顔も見られなかった。

楽しい時間はあっという間に過ぎるが、厭なもの待っているときも時間の進みは早い。

コケコッコー。

近所で飼っている鶏の鳴く声が聞こえた。

当日の朝、早くから目覚めていたのに、私は布団から出ようとはしなかった。耳を澄ましても雨粒の落ちている気配もない。運動会は

予定通り始まる。

気の早い大人たちは、場所取りをするためにゴザを抱え、校門の前に集まっているのかもしれない。当時、小学校の運動会は町の一大イベントでもあった。

初めての運動会を楽しみにしていた弟が、家の中をバタバタと走り回る足音がする。

「美代子、起きなさい」と、母が私を起こしにきた。

「母さん、私、おなか痛い」そんな嘘がとつさに口から出てしまった。

「いいから早く、支度しなさい」

母には、仮病だと分かっていたに違いない。

仕方なく布団から抜け出すと、枕元には真っ白な運動着と赤いハチマキがきちんと畳んで置いてあった。

着替えて、朝食の用意された卓袱台に着くと、両親と姉弟がみんな私を待っている様子だった。

私はひと言もしやべらずうつむいていた。

と、父がゆつくりとした口調で「美代子、この間のことなら気にすることはないぞ」と、話しかけてきた。

「うん？」

私は目を擦りながら、父親の言う意味を理解しようとした。

「この家のことなら、何も心配することはない。父さんは、自分の子が侮辱されてまで他人にこびへつらうのはイヤだ。父さんは無学だけれど、そういうことは分かる。貧乏人だからって恥じる気もない。出て行けつて言うなら出ればいい。それだけだ。だから、お前は何も気にせず思いっきり走れ」父は目を細めて穏やかな笑顔で言った。

「父さん……」

「それから、これ」

父は卓袱台の下から紙袋を取り出すと私に渡した。

「うん？」

「開けてみる」

私は急いで袋を開けた。そこには真っ白なズックがあった。

「安もんでごめんね」と、母が謝った。

私は大きく頭を振った。

横から覗く弟が「いいなあ、僕のは？」と、訊く。

「お前は、今日、一等賞になったら」姉がふざけてからかう。

「ちえー」と、不満を漏らす弟を父は自分の膝の上に乗せた。

「美代子は、とにかく頑張れ」父はそう言っただけで何度か頷いた。

「ありがとう……」それ以上は言葉にならなかった。同時に、^⑤仮病まで使って逃げてしまおうと考えた自分が恥ずかしくなった。と、キキキキッと音を立て玄関が開いた。兄が息を切らしながら勢いよく駆け込んできた。

「おお、間に合ったか。美代子、ほら、幻のガラスウリだ」

兄の手のひらには橙色の実がたくさん載っていた。裏山まで自転車を飛ばし、採りに行ってくれたのだった。

「兄ちゃん、僕には？」弟が兄に駆け寄る。

「ああ、お前の分もある」

「やったあ」弟がはしゃぐ。

「美代子、いいか。これ塗って、絶対負けんなよ。負けたらぶつとばすからな」

荒っぽい言い方だが、触れた兄の手は温かかった。

「兄ちゃん、ありがとう」涙が止まらなくなった。

（森浩美「こちらの事情」より。作問の都合上、表現を改めた部分があります。）

※ 本文中から抜き出して答える問題では、句読点や「などの記号は、字数に数えないものとします。」

問一——線部①〈運動会は毎年、私にとつての晴れ舞台だった〉とありますが、〈運動会〉が〈晴れ舞台〉になるのは、美代子にとってどのような日ですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア クラスの仲間と協力し合つて、勝利を目指すことができる日だから。

イ 優等生である自分の姿を家族に実際に見てもらうことができる日だから。

ウ いつも負けてばかりいる晶子に唯一、勝つことができる日だから。

エ 人を追い抜きながら走る気持ちよさを感じることが出来る日だから。

オ 足が速いという自分の長所を思い切り発揮することができる日だから。

問二——線部②〈精一杯の嘘をついた〉とありますが、なぜ美代子は〈精一杯の嘘をついた〉のですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 毎年謝ってくる母がうつとういので、もう放っておいてほしいとなんとか伝えたかったから。

イ 母に対して気を配りつつも、新しい靴がほしいという本心になんとか気づいてもらいたかったから。

ウ 新しい靴はほしいのだが、急に用意されても困るのだということを別の言い方で伝えようとしたから。

エ 母に心配をかけたくなって、新しい靴がほしいという本心をなんとかして押し隠そうとしたから。

オ 貧しさを気にしている母がかわいそうなので、なんとかしてはげましてあげたかったから。

問三 に当てはまる言葉を、ひらがな7字で答えなさい。

問四——線部③〈捨て台詞〉の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 立ち去るときに言い放つて、相手をおどす言葉。

イ どうしようもない相手を見捨てて言う言葉。

ウ 言つても無駄だとは思ひながらもとりあえず言う言葉。

エ 説明が伝わらないので、投げやりになつて言う言葉。

オ 別れを告げるために使う、決まりきつた言葉。

問五——線部④〈私は追い込まれていく気分になつていた〉とありますが、美代子がこのような気分になつていたのは、どのような考えが頭にあつたからですか。その考えが分かる、連続する二文を探し、最初の5字を抜き出しなさい。

問六——線部⑤〈仮病まで使つて逃げてしまおうと考えた自分が恥ずかしくなつた〉とありますが、美代子が〈恥ずかしくなつた〉のは、両親の気持ちを分かつていなかったことに気づかされたからです。その両親の気持ちを、解答欄の「」に続くように20字以上25字以内で答えなさい。

問七

〰〰線部へ幻のカラスウリとありますが、へカラスウリは本文中ではどのようなものとしてとらえられていますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア へカラスウリは、自分たちにひどいことをした昆虫には、四人集まれば勝てるはずという、美代子たちの連帯感と強い意志の証として登場する。美代子の意志が鈍り、リレーに出場したなくなると、それは意識の中から消えてしまう。しかし、美代子が走ることを決意したとき、その思いを最後まで持ち続けられるように美代子のお守りとして再登場する。

イ へカラスウリは速く走るために必要なものであり、それを美代子が取つてくることでリレーのメンバーに連帯感と勝利への希望が生まれる。美代子の意志が鈍り、リレーに出場したなくなると、それは意識の中から消えてしまう。しかし、美代子が走ることを決意したとき、へカラスウリを手に入れることで勝利への自信を持つことができた。

ウ へカラスウリは、運動会でなんとしてでも一組に勝ちたいと思う三組のリレーのメンバー全員を支えるお守りとして登場する。美代子の意志が鈍り、リレーに出場したなくなると、それは意識の中から消えてしまう。しかし、美代子が走ることを決意したとき、三組のリレーのメンバーが一丸となって勝利をつかみとる、最高のお守りとして再登場する。

エ へカラスウリは、リレーで昆虫に勝ちたいと思う美代子が、仲間の気を引くためのものとして登場する。美代子の意志が鈍り、リレーに出場したなくなると、それは意識の中から消えてしまう。しかし、美代子が走ることを決意したとき、兄の助けでへカラスウリが手に入ったため、勝利への強い思いを仲間理解してもらったことができた。

オ へカラスウリは、自分たちにひどいことをした昆虫のいる一組に絶対に負けたくないという、美代子たちの連帯感と勝利への強い意志の証として登場する。美代子の意志が鈍り、リレーに出場したなくなると、それは意識の中から消えてしまう。しかし、美代子が走ることを決意したとき、それを後押しする家族の気持ちが込められたものとして再登場する。

受験番号は解答用紙の右のらんにも記入しなさい。